

東北大学医学部保健学科 同窓会新聞

ご退職される先生のご挨拶

令和4年度をもって、2名の教授がご退職されることとなりました。ご挨拶を頂戴しましたので、ご紹介いたします。

ウイメンズヘルス・

周産期看護学分野 教授

吉沢 豊子 先生



2003年医学部保健学科に第一期生を迎える年に、看護学専攻の教授として就任し、19年間保健学科、保健学専攻博士前期課程、博士後期課程の設置に携わってきました。前身の東北大学医療短期大学の卒業生として、短大から大学化への設置の遅れを取り戻すために、そして旧帝大の医療系学科、大学院としての名に恥じないようという思いで、教職員の皆様、学部生、大学院生と歩んできました。この19年間で、保健学科長4年間、医学部・医学系研究科の副学部長・副研究科長を4年間それぞれに携わらせて頂きました。ここで私の役目は、一応終了したと思っております。あとは、次の世代に引き継ぎます。

私は、専門は何ですかと問われたときに、ウイメンズヘルス看護学ですとお伝えしています。これまで母性看護学と言っていた領域でしたが、女性の生涯を通じての健康の視点を重視すること、さらにこれまでの次世代を健康に生み育てる役目を含めるという学問領域の拡大を試みました。そして、日本で初めてウイメンズヘルス看護学分野という名前の分野で教育・研究に従事してきました。このことについては、私の最終講義でお話をさせて頂きました。ご興味のある方は是非講義のYouTubeをご覧になっていただきたいと思います。



この19年間の在職中に東日本大震災を経験しました。この時、私は保健学科長をしていました。保健学科の長として何ができるか、当時はどうすればいいのかが正直わかりませんでした。その後、その当時の研究科長・医学部長であった現在の山本雅之東北メデイカル・メガバンク機構長のリーダーシップ

発行人 大森純子
発行所 東北大学医学部保健学科
仙台市青葉区星陵2の1
編集人 東北大学医学部保健学科
同窓会新聞編集委員会
編集委員 奥村剛志、山田歩実
友野優梨、武石陽子

プのもと医学部の全体の復旧・復興のために取り組ませていただきました。本来3月25日が東北大学の学位授与式の日でしたが、既に中止が決まっていたので、3月25日の3日前卒業の日を迎えるはずだった4年生の学生が私を訪ねてきました。「先生、仮の卒業式でいいからやりたい。4年生には声を掛けます。」と。そこで、3専攻の主任の先生に声をかけ、保健学科総務係の協力も得られ、研究科長にも挨拶を頂き、卒業式を挙行しました。集まった学生は30人くらいでしょうか、仮の学位記をお渡しし、お祝いの花束、参加者全員の記念撮影を致しました。その時の学生たちは、12年の時を経て、それぞれの思いを持ちながら立派な社会人となっています。私の中では忘れられない思い出です。皆様、本当にお世話に



なりました。保健学科の発展と卒業生の益々のご活躍を祈念いたします。

感染分子病態解析学分野 教授

川上 和義 先生



2023年3月末をもって東北大学を退職します。2005年、保健学科新設2年目に琉球大学から着任し18年が経過しました。赴任当初は改修前の建物で、1期生の皆さんとともに古い教室や実習室で講義、実習を開始したことが懐かしく思い出されます。その後保健学科棟の改修が行われ見違えるような校舎に変貌し、より快適に講義や実習が実施できるようになりました。その間、東日本大震災を経験するなど大変なこともありましたが、素晴らしい教職員や周囲の先生方に助けられ、また優秀な学生さんたちと一緒に楽しく有意義な教員生活を送ることができました。長い間お世話になりました。ありがとうございます。

私は、長崎大学医学部を卒業後、2年間の研修医期間を終え、熊本大学大学院医学研究科で大学院生としてT細胞活性化機構について研究し、さらに米国マサチューセッツ大学医学部へ博士研究員として留学しB細胞活性化機構についての研究を行いました。帰国後は長崎大学医学部第二内科を経て、琉球大学医学部第一内科で13年の長きに渡り臨床と感染免疫の研究に携わりました。その後、東北大

学へ赴任し、医学部保健学科の学部教育、保健学専攻での大学院教育、感染免疫の基礎研究とともに臨床への応用を目指した開発研究に取り組みできました。その間、多くの優秀な大学院生の研究指導を担当させていただきました。その後彼らが医療機関や企業、大学などの研究教育機関へと進み幅広い分野で活躍している姿を見聞きすることができ嬉しく思っています。今後、さらにもっと活躍していただくのが大変楽しみにしています。最後の6、7年は酸化鉄ナノ粒子を用いた新規ナノ粒子ワクチンの開発研究を推進し、肺炎球菌、真菌、SARS-CoV-2のワクチン開発を試みました。動物モデルでは良好な結果が得られていますが、これを臨床応用へ繋げていくために次の世代に引き継いでいただけるのを期待しています。

新任の先生のご挨拶

令和4年度下半期に入り、新たに1名の教授が本学科に就任されました。ご挨拶を頂戴しましたので、ご紹介いたします。

画像情報学分野 教授

増谷 佳孝 先生



2022年9月1日付で画像情報学分野教授を拝命いたしました。増谷と申します。前教授の町田先生の後任として、MRIの基礎および応用に関する研究教育に携わらせていただきます。最近はコロナ等の影響で帰郷できておりませんが、出身は阿波踊りの本場、四国の徳島です。大学進学時に東京し、東京大学工学部および同大学院の生体工学系の研究室にてMRIを中心とした画像処理の研究を行いました。血管内治療の支援技術を対象とした学位研究においては、東北大学および関連病院の方々に大変お世話になったこともあり、今回の着任で勝手ながら仙台との



最後の3年間はCOVID-19のために、それまで当たり前だった対面での講義やディスカッションができません。ほとんどがオンラインでの実施になってしまったのが残念でした。ようやく終わりが見えてき

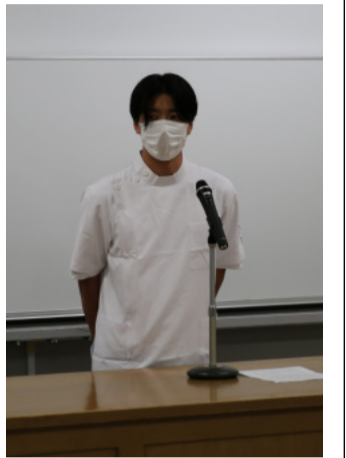
ご縁を感じています。そして今日に至るまで画像処理とその応用を対象としていますが、最近では拡散MRIなどの定量的MRIにより生体組織の微細構造とその機能の定量解析に関する研究を行っています。特に現在は、新しい数理モデルの構築や機械学習による高精度な解析手法の開発と応用に注力しています。以前、東大病院に講師として所属し、臨床の放射線科医や診療放射線技師の方々と10年以上にわたり共同研究を行う機会があり、研究成果を真に社会で役立たせるには医療の現場で日々奮闘される方々との協力が不可欠であると感じました。今回の着任により、未来の医療の一翼を担う診療放射線技師の卵の方々の育成、そして臨床現場の方々と共同研究ができることを楽しみにしています。どうぞよろしくお願いいたします。

ウェアセレモニー

今年度は、令和4年9月27日に放射線技術科学専攻、9月22日に検査技術科学専攻のウェアセレモニーが行われました。代表を務めました学生さん方の決意表明の言葉を紹介します。

放射線技術科学専攻3年 高橋 秀侑

本日はウェアセレモニーを開催して頂き本当にありがとうございます。クラスで対面という形で開催でき、本当に嬉しく思うと同時に、白衣を来たクラスのみんなの姿を見るといよいよ実習が始まるんだという実感が湧いてきます。私たちは入学と同時にコロナウイルスの感染が拡大してしまい、思



い描いていた大学生活とは異なるものとなってしまいました。1年生の間は、授業はもちろん入学式もオンラインとなつてしまい、ほとんどキャンパスに通うことなく終わりました。2、3年生にならずに少ずつ対面が増えキャンパスに通う回数も増えて行きました。この2年半オンライン、対面両方で授業や実習を受けてきた私たちは、対面での授業や実習がオンラインのものに比べ身になりやすいというのを知ることが出来ました。そのため、実習を対面で行って頂けることに本当に嬉しい気持ちでいっぱいです。また、連日医療現場の逼迫がさまざまなメディアで報道されています。そのような大変な状況にも関わらず、私たち学生の実習を受け入れて下さる病院の方々や指導をして下さる先生方には深く感謝しております。私たち学生はこの気持ちを忘れることなく実習に臨みたいと思います。また、先程も述べましたが、今回の実習はコロナウイルスの感染が拡大している中でのものとなり



ます。そのため、私たち学生はこれまで以上に感染の予防に努め、自分たちの行動に責任を持つことが必要になると思います。白衣を着て病院に出れば私たちは1人の医療関係者となります。病院スタッフの方々、患者さんやその御家族の方など多くの方々と接することになります。自身の健康はもちろん、周りの方々の健康を守るためにも感染対策を徹底し、病院内にウイルスを持ち込まない、病院内に持ち出さないようにしていきたいと思えます。



最後になります。実習とは現在私たちが放射線専攻の先生方から学んだことをより実践的なものにする大切な機会です。そのためこれからは放射線専攻の先生方に加えて、病院の先生方のお力も借りて最大限成長できるように頑張っていきたいと思えます。また、実習で学ぶことを最大限吸収できるように良い緊張感を持って実習に望みたいと思います。時に友人と助け合い、実りの多い実習になるよう各々が最大限努力することをここに誓い、2022年度放射線技術科学専攻3年生の臨地実習に向けての決意表明とさせていただきます。

いただきます。



検査技術科学専攻3年 長沼 杜羽子



本日は、新型コロナウイルス感染症の流行に伴い様々な学校行事が中止されている中、私たちのために、このような式典を開催して頂きありがとうございます。この場をお借りして、ご尽力頂いた先生方、および、学校関係者の皆様に感謝申し上げます。

私たちは、いよいよ始まる臨地実習に対して正直不安の気持ちもありませんが、それ以上に、この白衣に袖を通し、実際に病院で臨地実習が行えることに、誇りと期待を持っています。ここで、これから迎える臨地実



習に向けての決意表明をします。まずは、「医療従事者としての自覚をもつこと」です。臨地実習中、私たちは、病院を利用される方から病院のスタッフさんと同じ医療従事者として見られてしまう時もあるかと思えます。「学生だから」「実習中だから」などの甘えは通用しません。未熟者ではありますが医療従事者・社会人の一員として恥じぬよう行動したいと思います。

次に、「更なる高みを目指し、探求心を持って全ての物事に取り



卒業研究発表会

令和4年度の卒業研究発表会が行われました。各専攻の担当教員よりご報告を承りましたので、ご紹介いたします。

- 看護学専攻 教務会
- 朝倉 京子 先生
- 菅原 明子 先生
- 清水 恵 先生
- 坂井 舞 先生

令和4年12月21日(水)に、2022年度(16期生)看護学専攻卒業研究発表会が開催されました。昨年度に引き続き、今年度もオンラインでの開催となりました。当日は67題の研究が発表されました。

16期生は、研究室に配属されてからの約2年間、新型コロナウイルス感染症の影響を受け、研究活動が制限されることも多かったかと思えます。そのような中でも、教員の指導の下、様々な工夫や努力で研究を進め、研究成果の発表に至りました。

背景

- 世界的な高齢者の増加で、認知症患者も増加すると考えられ、**認知症ケアの知識と技術を持った人材が長期的に必要**
- 認知症の**行動・心理症状**は認知症患者の8-9割に見られる
- 背景にある**ニーズ**に応じて個別化された**心理社会的な対応**が国際的に推奨されている

今年度の発表は、看護技術開発分野6題、成人看護学分野4題、がん看護学分野2題、緩和ケア看護学分野5題、小児看護学分野5題、精神看護学分野8題、公衆衛生看護学分野12題、看護管理学分野7題、老年・在宅看護学分野5題、ウイメンズヘルス・周産期看護学分野12題、医学科1題でした。

今年度もオンラインでの開催でしたが、画面越しからも研究に対する熱意が伝わる発表会となりました。2年間の卒業研究を通して、テーマに対する理解が深まったとともに、科学的に事象を見つめる力、論理的な思考力や表現力を身に付けることができたのではないのでしょうか。この経験は、臨床現場における看護の探求にも大きな力となると思います。是非この経験を生かし、学生が大きく飛躍することを願っています。

医用物理学分野 教授
権田 幸祐 先生

令和4年11月30日(水)、星陵オーデトリウム講堂にて、保健学科放射線技術科学専攻卒業研究発表会が開催されました。今年度は、本専攻の6つの分野の研究室に配属された学生31名とサイクロトロンRIセンター(CYRIC)の研究室に配属された学生3名の合計34名が発表を行いました。本専攻やCYRICは、X線、MRI、PET、蛍光など様々なモダリティを使い、病態イメージングや診断・治療技術開発を中心とした研究を進めています。このような背景から本年度の卒業発表会では、「がん、認知症、血栓症、筋萎縮などの疾病のメカニズム解明」、「腫瘍像や死後CT画像解析への深層学習の応用」、「AIを用いた乳がんトモシンセシス画像の解析」、「PET診断の再現性評価」、「原子力災害時用体表面汚染検査装置の性能評価」、「陽子線とホウ素による放射線治療効果の評価」、「前立腺がんや子宮頸がんに対する放射線治療技術開発」など多岐に渡る研究領域の発表がありました。質疑応答では、多くの3年生が積極的に挙手し質問している頼もしい姿が見られ、とても活発な議論が行われました。4年生の研究への熱意と、先生方の丁寧な指導のシナジー効果によって、発表内容は年々高度になっていきます。実際、4年生の中には、大学院進学後の国際会議や論文投稿へ繋がる成果を上げている学生も多くいます。数年前から教育課程が改訂され、卒業研究はこれまでより半年早い3年生後期から開始されています。これにより4年生から3年生への研究内容の継承は、よりスムーズにかつ効果的に行われるでしょう。放射線技術科学専攻の各分野の特徴を活かした、さらなる研究成果の充実が期待されます。



臨床生理検査学分野 教授
三浦 昌人 先生

令和4年度の検査技術科学専攻卒業研究発表会は、2022年1月17日に星陵オーデトリウムで開催されました。コロナ感染が小康状態にはありましたが、2年生から4年生までの約1000人が集まることに若干の不安もあり



ましたが、クラスター等のトラブルもなく無事に終了しました。4年生38人が発表8分、質疑応答2分の計10分を持ち時間として午前9時から午後17時10分まで研究発表を行い、同時に4年生の13人が座長として司会進行を、3年生の全員がタイマー係、照明係、マイク係としての役割を担いました。学生達だけで発表会の運営を担いました。毎年のことではありましたが、私が初めに大まかなことを説明するだけで、発表会は粛々と進行し、私は観客の1人として発表内容に集中することができました。立派な研究発表や適切な発表会の運営に、授業のときとは別人のようには携わる学生達を見るにつけ、学生達の潜在能力の高さに新鮮な驚きを感じると共に、このような能力を生かせるような環境で今後とも働いていけることを祈念しました。今年の4年生の6割は大学院へと進学し、4割は病院あるいは企業等への就職と進路がほぼ決まっています。卒業後も新たな環境で自分達の能力を十分に発揮していけるものと確信しております。最後に、難解な研究内容を学生達や素人の私にも十分理解できるよ



令和4年度 保健学科同窓会総会 および研究活動報告

うな研究発表にまで学生達を導いて下さいました各分野の先生方のご尽力に心より感謝申し上げます。

本日はご出席いただき誠にありがとうございます

■受領の際の注意

- 総会のスクリーンショットや動画の撮影はお控えください。
- 新しい知見や事例の詳細が多く表示されますので、**不特定多数の人の目に触れない空間で聴講**してください。
- ※決してカフェなどで聴講しないでください。
- 発表者へのご質問は**随時チャット**にご記入ください。
- マイクをオンにしてご発言していただいても結構です。
- 入退出は自由ですが、ぜひ、第2部までご出席いただきますよう、お願いいたします。

令和4年度 東北大学医学部保健学科同窓会 総会

令和4年8月8日(月) 17:30~18:45

● #1 研究活動報告

小児神経科医が捉える小児期発症 小児がん患者の移行期支援の現状と課題 佐々木 匠 小児看護学分野 M1

心臓カテテル検査における小児放射線被ばくに関する研究—放射線制御学専攻長報告— 山田 歩実 放射線技術科学専攻 M2

赤白血病における転写因子GATA1の機能解析 成澤 志保 分子血液学分野 M2

● #2 総会

- 保健学科同窓会役員について
- 令和3年度決算報告について
- 令和4年度予算案について
- その他

令和4年8月8日(金)、オンラインにて令和4年度保健学科同窓会総会が開催されました。例年と同様に2部構成からなり、第1部は「研究活動報告」と称し、看護学専攻、放射線技術科学専攻、検査技術科学専攻から1名ずつ、現在の研究活動や国際学会での発表経験やその様子などについて報告をしていただきました。後ほど3名の研究活動報告の内容をご紹介します。

第2部では以下のような議題で議事を進行し、役員及び予算が決定しました。

■開会のご挨拶

会長 大森 純子先生 (公衆衛生看護学分野)

■保健学科同窓会新役員人事

会長 大森 純子先生

副会長 友野 優梨 (公衆衛生看護学分野)

小児看護学分野 博士課程前期 1年 佐々木 匠

山田 歩実 (放射線検査学分野)

奥村 剛志 (臨床生理検査学分野)

武石 陽子先生 (ウイメンズヘルス・周産期看護学分野)

稲葉 洋平先生 (放射線検査学分野)

高木 清司先生 (病理検査学分野)

監事 保健学科各専攻主任

■令和3年度決算報告

■令和4年度予算案



令和4年6月24日(金)から26日(日)にかけて三重県総合文化センターで行われました「第69回日本小児保健協会学術集会」に現地参加し、卒業研究の成果を演題発表してきました。昨今のCOVID-19の流行により、現地での学会開催が厳しい状況が続いておりましたが、今回は久しぶりの現地開催であり、私としては初めての現地開催での学会参加でした。現地ならではの空気感や本来の学会が

どのように進行しているのかなどを知る貴重な経験となりました。

私は「小児期発症てんかん患者の成人移行支援」をテーマに研究をしており、今回の演題発表では、支援の全体像とその中での課題を明らかにするべく小児神経科医へのインタビュー調査をまとめた卒業研究の内容を発表しました。会場には自分の研究に精通している専門家も多くおり、鋭い指摘をいただいたり、研究内容についてディスカッションをすることができ、今後の研究をどのように進めていくべきかのビジョンが明確化された気がしました。

研究で得た知見を世の中に還元していくことは研究を行う上で一番大きな目的であると私は考えております。学会発表も世の中に還元していく行程の第一歩であり、研究者自身としても有意義な経験となると思います。これを読んでいる皆様もぜひ今後の学会発表を検討してみてくださいいかがでしょうか。

結果・考察(1)

現状

カテゴリー	サブカテゴリー
「移行のしやすさに関する子供と家族の背景」	移行のしやすさにネガティブに働く子供の背景
	小児特有疾患 情緒の不安定・行動異常 年齢に合わせた生活

知的・発達障害、小児特有疾患、医療的ケアが必要な疾患などをはじめとした、**てんかん以外の合併症がある事によって成人医療への移行が難しい**

課題	カテゴリー	サブカテゴリー
「成人医療」	在宅診療医への移行の難しさ	薬の知識の不足、脳波の読影の未経験
	成人のてんかん診療医への移行の難しさ	医療的ケアの管理の難しさ 発達障害・知的障害への対応の難しさ てんかん以外の合併症との薬の調整の難しさ
移行先の不足	重症度に合わせて病院選び	重症度に合わせて病院選び
	受け入れ先の病院の設備が不十分	受け入れ先の病院の設備が不十分

背景

小児被ばく

成人よりも小児の方が、放射線被ばくの影響

- ・幼い小児の被曝の場合平均リスク、特に甲状腺がんの平均リスク上昇が報告されている。
- ・若い頃に発症するがんは人生後半に顕在化するがんには比べるかに大きな生存期間の喪失につながる。

皮膚障害の閾値

初期紅斑 3Gy

- ✓ 閾値とは全体の1%の人々に影響を生じる線量
- ✓ 医療被ばく線量限度は定められていない(診断参考レベル)
- 正当化・防護の最適化が重要

小児心臓カテテル検査の診断参考レベル

年齢	K _{0.1} (mSv)	K _{0.01} (mSv)
<1歳	100	7
1~<5歳	100	10
5~<10歳	100	10
10~<15歳	200	40
15歳以上	100	5
1~<5歳	210	10
5~<10歳	210	10
10~<15歳	300	40

小児心臓カテテル検査の診断参考レベル

私は令和2年度に東北大学の保健学科 放射線技術科学専攻を卒業後、大学院 保健学専攻 放射線検査学分野に進学しました。この度、2022年3月にオンライン開催、7月に現地ウィーンとオンラインのハイブリット開催が行われた欧州放射線学会にて発表する機会がありましたので、その内容を帰朝報告させていただきます。本来ならば7月にウィーンに向いて、参加しなかったのですが、昨今のご時世から、現地参加はかなわず、3月・7月どちらもおオンライン参加となりました。普段から放射線被ばく・防護に関する研究を行っており、欧州放射線学会では「心臓カテテル検査における小児放射線被ばくに関する検討」についてポスター発表いたしました。ポスター発表の形式としてEPOS(電子プレゼンテーションシステム)というシステム

放射線検査学分野 博士課程前期 2年 山田 歩実

私は保健学科検査技術科学専攻を卒業後、大学院に進学し、分子血液学分野にて研究を行っております。この度、令和4年5月27日から28日にわたって山形県鶴岡市にて開催された日本生化学会東北支部第88回例会・シンポジウムに参加させていただきましたので、報告いたします。

分子血液学分野 博士課程前期 2年 成澤 志保

欧州放射線学会 2022

- ・オンライン開催 2022.3.2~2022.3.6
- ・現地開催 2022.7.13~2022.7.17

ポスター発表 (EPOS™)



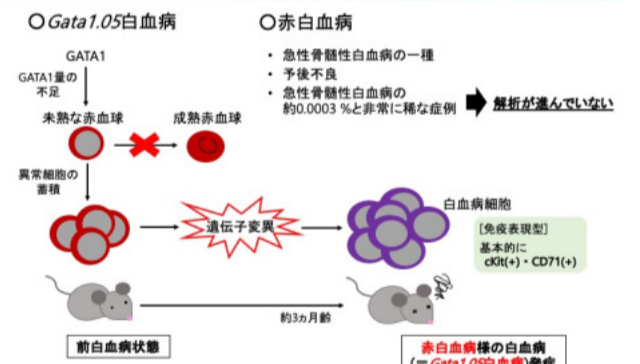
Austria Center



テムを採用しており、全てのポスターをオンライン上で誰もが閲覧できるようになっています。学会に参加することで、世界の放射線に関する最先端の研究を学ぶことができ、視野を広げるとても貴重な機会となりました。今回の経験を今後の研究活動や進路に活かしていきたいと考えております。

最後に、学会発表の機会をくださったご指導いただきました千田浩一教授をはじめ、放射線検査学分野の皆様へ感謝申し上げます。

背景: 赤白血病とモデルマウスについて



今年の例会・シンポジウムは3年ぶりの現地開催となり、活発な議論が交わされ、非常に刺激を受けた実りある2日間でした。私は現在、赤白血病における赤血球分化マスタータン転写因子の機能を明らかにすべく研究を行っており、当日はポスターにて発表させていただきました。学会発表ならびにポスター発表は初めての経験だったため、背景や要点を短時間で分かりやすく正確に伝えるにはどうすべきかを意識して準備を進め、当日を迎えました。発表ではこれまでの意見や質問をいただくことができ、自分の研究内容をより広い視点で捉え、考えることの難しさや重要さを実感いたしました。また、他の方の発表を聴講する中で自分の発表や研究への向き合い方で不足している部分を痛感し、その後の研究活動を行ううえで自分の意識を変える一つの契機となりました。

最後に、日頃からご指導、ご鞭撻いただき、本例会・シンポジウムでの発表の機会を与えてくださいました清水律子教授をはじめ、分子血液学分野ならびに関連分野の皆様へ御礼申し上げます。

人事異動

令和4年度下半期に行われた人事異動についてご報告いたします。

- ウイメンズヘルス・周産期看護学分野
教授 吉沢 豊子先生
退職 (令和5年3月31日)
- 感染分子病態解析学分野
教授 川上 和義先生
退職 (令和5年3月31日)
- 画像情報学分野
教授 増谷 佳孝先生
着任 (令和4年9月1日)
- 成人看護学分野
講師 菊地 史子先生
退職 (令和5年3月31日)
- 老年・在宅看護学分野
講師 清水 恵先生
昇任 (令和5年1月1日)
- 看護技術開発学分野
講師 丹野 寛大先生
昇任 (令和5年2月1日)
- 公衆衛生看護学分野
助教 中野 久美子先生
着任 (令和5年1月1日)
- 看護技術開発学分野
助手 佐藤 佑樹先生
着任 (令和5年3月1日)
- ウイメンズヘルス・周産期看護学分野
助手 櫻井 碧先生
退職 (令和5年3月31日)

編集後記

第28回となる同窓会新聞も、ご協力いただいた皆様のおかげで、無事に発行することができました。年度末及び新型コロナウイルスによる対応でお忙しい時期であったにも関わらず、寄稿してくださった先生方、学生の皆さん、また写真を提供してくださった医学部広報室の皆様へ心より感謝申し上げます。

ところでこの第28号の新聞記事を読んでいらつしやる皆さんは、前回お知らせした医学部保健学科同窓会ホームページを覗いたことがあるでしょうか。

春らしい色合いと、三専攻を表した3色のグラデーションが鮮やかなホームページにリニューアルされました。

今後も随時更新していきますので、ぜひご覧ください。

医学系研究科保健学専攻
博士前期課程
奥村剛志、山田歩実

東北大学医学部保健学科同窓会

HOME イベント トピックス 同窓会について 活動レポート 同窓会新聞 お問い合わせ

Health Sciences
Tohoku University School of Medicine, Health Sciences
東北大学医学部保健学科同窓会

EVENT & INFORMATION